

フランスにおける『源氏物語』の受容

エステル レジェリー＝ボエール

はじめに

今年は、日仏交流150周年記念と源氏物語千年紀が重なり、しかも、『源氏物語』の「桐壺」(第一帖)の新らしいフランス語訳が刊行され、さらに挿絵付きのフランス語完全訳の『源氏物語』という豪華本が去年(2007年)の9月に出版された。これら出来事が本稿のきっかけになっている。

しかしフランスにおける『源氏物語』の受け入れ状況を冷静に眺めると、この作品に対する認識はまだ浅いと認めざるを得ない。普通のフランス人の場合はタイトルさえ聞いたことのない人々が大多数で、知識人層においてすら、日本文学に特に興味がない限りは、タイトルぐらいは聞いたことがあるだけにとどまり、それ以上の知識を持つ人は残念ながらほとんどいない。このような状況の中では、フランスの若者にとって日本文化全体への入り口として大きな役割を果たしている日本のポップ・カルチャー、特にマンガの仏語版に大和和紀著『あさきゆめみし』のようなマンガが入っていないということも惜しまれるのである。真面目には、あるいは聞こえないかもしれないが、現代日本社会が見た『源氏物語』として、マンガの仏語訳版が出れば、フランス人の若い世代の中でも平安時代の『源氏物語』に対する興味や研究がふえるに違いない。

現在、このような状況でありながら、挿絵付きの仏語完全訳の本、3500部が数か月で完売され、さらに今年(2008年)の9月には普及版6000部が売り出された。図版が美しいから評判になったというだけではなく、今まで見落としていた世界一流の文学作品、すなわち小説としての『源氏物語』それ自体が強い興味を引いたように思われる。従ってこの現象は、フランス人の間で『源氏物語』に対する興味が、少なくとも潜在的には存在しているということを示したと言ってもいいのではないだろうか。

本稿では、『源氏物語』の仏語訳を中心に、『源氏物語』のフランスにおける受容の変遷を紹介したい。

ウェーリー英訳の延長線に位置づけられる作品

・キク・ヤマタ

キク・ヤマタの「Le Roman de Genji」は『源氏物語』仏語訳の最も早い例である。半分日本人、半分フ

ランス人のキク・ヤマタについては、筆者の知る限りでは、フランス語のものは本が一冊と論文が一つある^[註1]。ここでその生涯を簡単にまとめておこう。彼女は、リヨンの日本領館の官員を父とし、リヨン出身のフランス人を母として1897年にリヨンに生まれた。母国語はフランス語だったが、9才の時、つまり1908年から1923年ごろまで、東京に住んでいた。カトリック系の高校を卒業した後、ジャーナリストとして活動し、それを通じて日本の文化に親しむ機会を得た。そして、1923-4年ごろにフランスに戻り、パリに住まいを定め、文学活動を始め、1925年に『マサコ』という小説を出している。これが高い評判を得、キク・ヤマタは少し有名になった。最晩年までに、小説、エッセー、伝記などを30冊ほど次々と出版した多作な作家である。

パリの1920年代と30年代には、キク・ヤマタは文学的なサロンに着物姿で現われていた。特に『マサコ』の宣伝のために用意された写真では、その着物姿が印象深い。「ラ・ジャポネーズ」(La Japonaise 日本人)というあだ名までつき、日本人の女性として迎えられ、人気を集めていた。フランス語が母国語で、容姿・顔立ちがフランス人の目から見ると日本的、しかも日本の文化に通じていたキク・ヤマタは当時のフランス人の日本に対する好奇心にこたえる役割を果たしたのである。

彼女がこうしてスポットを浴びたのは、ちょうど1925年にアーサー・ウェーリーの『源氏物語』の英語訳が刊行された時代だった。英語が達者であったキク・ヤマタはそれをフランス語に訳した。1928年に出版された『Le Roman de Genji』、『源氏の小説』というタイトルを持つ、桐壺帖から葵帖までの9帖からなる316ページの翻訳である(図1)(図2)。表題ページには、「Traduit par Kikou Yamata, d'après la version anglaise de A. Waley et le texte original ancien」、つまり「アーサー・ウェーリー英訳と原文をもとにしたキク・ヤマタの仏訳」と書かれている。

9帖というのはちょうどウェーリーの英訳の第一巻に相当する帖数なのであるが、前書きでは仏語訳の続刊予定については何もふれず、英訳が半分、つまり3巻しか出ておらず、残りの3巻がこれから出版されるだろうと述べているのみである。この前書きに



図1 『Le Roman de Genji』キク・ヤマタ仏訳
1928年 Librairie Plon出版 表紙

は、与謝野晶子の現代語訳も読んだが、晶子の翻訳は「原文を単純化し極端に省略している」(Sa traduction simplifiée et raccourcit singulièrement l'œuvre, p.VII)と批判している。そして、ウェーリー訳をほめたうえ、自分の仏語訳の目的を、「この日本の文学作品の英語のありかた、フランス語のありかた、そして日本語原文の三つをつなぎ合わせようとした」(« J'ai voulu relier entre elles ces formes anglaise, française et l'original de l'œuvre japonaise. P. VII)と説明している。

さらに、仏語訳をするに当たって、ウェーリーの英訳以外に、原文をも参考にしたと理解できる書き方もしているので、純粋な翻訳でもなく、純粋な二次訳でもない、特殊な性質のテキストのようにみえるが、その点については再検討の必要がある。

キク・ヤマタの訳を読むと、まずその明瞭な文体に驚く。原文と違って、文章は短く、会話の部分は会話として、しかもだれの言葉であるかははっきりと表わされている。言葉遣いは現代的で、古風な句いは全く漂っていない。全体として読み易い文体で書かれているのであるが、当時高い評判を得、『源氏物語』を世界一流の文学としてはじめて認めさせたウェーリーの訳とどのような関係があるのだろうか。キク・ヤマタの翻訳をウェーリー訳と数箇所比較してみたが、ウェーリー訳に負う所は非常に大きいと分かった。

以下にまず、「若紫帖」で、病気で里邸に退出した藤壺の更衣に、王命婦の手引きで光源氏が近づくとという有名な場面のウェーリー訳を引用する。

About this time Lady Fujitsubo fell ill and retired for a while from the Palace. The sight of the Emperor's grief and

TABLE DES MATIÈRES	
	Page
PRÉSENTATION	1
CHAP. I. — Kiritsoubo. — La Concubine de la Chambre des Paulownias	1
— II. — Hahakigi. — Le Cypripis d'Été	25
— III. — Outsou-semi. — La Cigale creuse	71
— IV. — Yongao. — La Belle-de-Nuit	83
— V. — Waka-Mourasaki. — La Jeune Violette	133
— VI. — Souetsoumou-Hana. — La Fleur de Safran	185
— VII. — Koyo-Setsou. — La Fête des Érables	221
— VIII. — La Fête des Fleurs	251
— IX. — Aoi, La Princesse Bleue	267

図2 同の目次

anxiety moved Genji's pity. But he could not help thinking that this was an opportunity which must not be missed. He spent the whole of that day in a state of great agitation, unable whether in his own house or at the Palace to think of anything else or call upon anyone. When at last the day was over, he succeeded in persuading her maid Ômyôbu to take a message. The girl, though she regarded any communication between them as most imprudent, seeing a strange look in his face like that of one who walks in a dream, took pity on him and went. The Princess looked back upon their former relationship as something wicked and horrible and the memory of it was a continual torment to her. She had determined that such a thing must never happen again.

She met him with a stern and sorrowful countenance, but this did not disguise her charm, and as though conscious that he was unduly admiring her she began to treat him with great coldness and disdain. He longed to find some blemish in her, to think that he had been mistaken, and be at peace.

I need not tell all that happened. The night passed only too quickly. He whispered in her ear the poem: 'Now that at last we have met, would that we might vanish forever into the dream we dreamed tonight!' But she, still conscience-stricken: 'Though I were to hide in the darkness of eternal sleep, yet would my shame run through the world from tongue to tongue.' And indeed, as Genji knew, it was not without good cause that she had suddenly fallen into this fit of apprehension and remorse. As he left, Ômyôbu came running after him with his cloak and other belongings which he had left behind.

(*The Tale of Genji*, by Lady Murasaki, translated from the Japanese by Arthur Waley, London, George Allen and Unwin Ltd, Boston and New-York, Houghton Mifflin Company, 1925 (再版1927), p. 157-158.)

次は同じ箇所の子マタ訳の引用である。

A cette époque, la princesse Foujitsoubou tomba malade et se retira du Palais. Le chagrin de l'Empereur, son anxiété, apitoyèrent Genji.

Pourtant il ne put s'empêcher de songer que c'était là une occasion à ne pas perdre ... Il passa ce jour dans la plus grande agitation, incapable, soit au Palais, soit chez lui, de penser à rien autre, ni de voir personne.

Le jour passé, il réussit à charger d'un message sa suivante Omyobou. La fille jugeait toute communication entre eux bien imprudente, mais l'étrange expression de son visage, semblable à celui d'un somnambule, la touchait. Elle y alla. La Princesse jugeait leurs anciennes relations coupables et horribles. Leur seul souvenir lui était un continuel tourment. Elle était résolue à ne jamais les renouveler. Elle le reçut donc avec tristesse et sévérité. Cela ne déguisait point ses charmes. Consciente de son admiration exagérée, semblait-il, elle le traita avec beaucoup de dédain et de froideur. Lui cherchait à découvrir en elle quelque défaut, pour se dire qu'il s'était trompé et pour recouvrer la paix.

Je ne dirai pas tout ce qui arriva. La nuit s'écoula trop rapide. Il lui murmura à l'oreille le poème :

*Enfin réunis
Pussions-nous disparaître à jamais
Dans le rêve si rare
Révé cette nuit.*

Mais elle, prise de remords, répondit :

*Cachée au noir sommeil éternel même,
Ma honte courrait le monde
De bouche en bouche.*

Et Genji savait. Ce n'était pas sans cause qu'elle succombait ainsi à cette crise d'appréhension et de remords.

Omyobou courut après lui avec son manteau et les objet qu'il oubliait en partant.

(*Le Roman de Genji*, Librairie Plon, Paris, 1928, p. 159-160).

両訳を比較すると、子マタ訳は英語の言葉をフランス語の言葉にほとんどただ置き換えただけ、すなわちウェーリー訳の文章をそのまま移し替えただけという作業を行ったことがわかる。わずか一部分の比較に過ぎないが、表題のページと前書きにあるようにウェーリー訳と原文とをともにフランス語に訳したとの主張と違って、ウェーリー訳のみをもとにしたように思わ

れる。しかし、詳しく比較すると、パラグラフの区切り方において仏語訳の方がずっと多く、しかも子マタ訳では、短い文章が好まれているので、リズムが流動性を欠いているが、逆に非常に読み易い文章になっている。『マサコ』などキク・子マタが書いた小説から見ても、短い文章は彼女の作家としてのスタイルだったと分かる。

また和歌について見ると、ウェーリー訳の特徴である散文部分に訳し込むという態度とは大きく違う方針を取っている^[注2]。仏語訳では、和歌はイタリック体で、改行を使って視覚的に散文とはっきりと区別している(図3)(図4)。フランスに於ける戦後の和歌の翻訳形式を予告するあつかい方ではあるが、3行か4行かに自由自在に割り付けていて、戦後の和歌の翻訳の形式として普通になった5行の分かち書きを選ばないということも注目される。

今後キク・子マタによる『源氏物語』の最初の仏訳について、より詳しい研究が必要だと思われる。特に出版後の受容状況についての研究が期待される。

・マルグリット・ユルスナール

1937年に出た、マルグリット・ユルスナールの「源氏の君の最後の恋」(« Le Dernier amour du Prince Genji »)も、キク・子マタの『源氏物語』訳と同様に、ウェーリーの影響を受けて書かれた短編小説である。内容は宮廷生活を捨てて、山にこもった光源氏の亡くなる前の一年間の生活をその最期の瞬間まで語ったもの、つまり、光源氏の最晩年が語られているはずの、タイトルだけしかない「雲隠れ」を意識して書かれたものである。

この短編では、年老いた光源氏は盲人となっており、そこに姿を変えて正体を隠した花散里が訪れ、最晩年の源氏に連れ添う者として光源氏の最後の恋の相手となる。光源氏は亡くなる直前に自分の生涯を回想し、最も愛した女達の名前を列挙する。この中に正体を隠した花散里が名乗った仮の名前を源氏は入れるが、花散里という名前を言い落とすため、花散里は絶望する。この絶望に落ちた女の描写でこの短編小説は終わる。要するに、「源氏の君の最後の恋」は、ある特定の恋愛関係における、当事者のアイデンティティ、相手に対する感情や認識、そして両者をめぐる特殊な事情がどのように恋愛感情の原因となり、恋愛関係を動機づけて行くかといった問題を取り上げている小説で、ユルスナールのごく個人的な『源氏物語』の理解を表わしたものと言っていいだろう。

しかし、この短編小説を読むと、例えば、須磨帖を彷彿とさせる箇所もあり、著者が『源氏物語』を詳

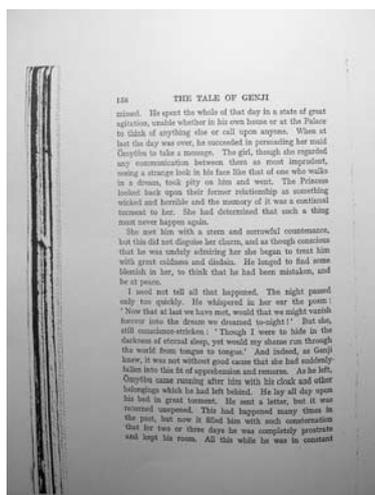


図3 『The Tale of Genji』アサー・ウェーリー英訳、George Allen and Unwin出版、1925年、「若紫帖」p. 158.

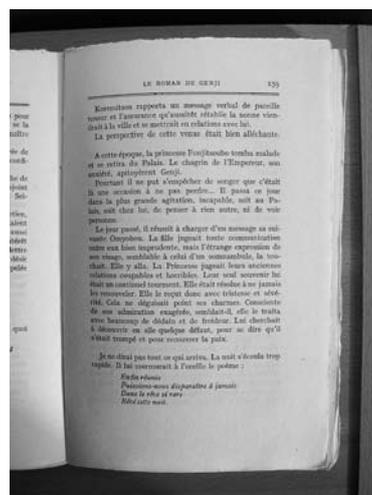


図4 『Le Roman de Genji』キク・ヤマタ仏訳、1928年、「若紫帖」p. 159

しく読んでいたことも分かる。ユルスナル自身は、ウェーリー訳に強い印象を受けたと言っている。ユルスナルについての研究はかなりあるので、この作品についてはこれとどめよう。

アカデミックな世界（イナルコ）が生んだ仏訳：原文をもとにした訳

フランスにおける現在の日本学を戦後創設した功労者として知られているシャルル・アグノエル（1900–1980）に以下の翻訳がある。

Le Genji monogatari, introduction et traduction du livre I par Charles Haguenaer. - Paris : Presses Universitaires de France, 1959. - 87 p. - (Bibliothèque de l'Institut des hautes études chinoises ; volume XII).

1959年に発表された桐壺帖のフランス語訳で、原文からの翻訳として、言及にあたいするが、アカデミックな世界を超えなかったものなので、その存在を示すにとどめよう。

次いで最も重要な、ルネ・シフェール（1923–2004）による完訳がある。1977年に前巻（藤壺帖–藤裏葉帖）、1988年に後巻が刊行され、ちょうど今年その20周年を記念すべき年にあたる。

Le Dit du Genji, traduit du japonais par René Sieffert, POF, 1977. Livres 1 à 33.

Le Dit du Genji, traduit du japonais par René Sieffert, POF, 2 vol. 1988. 完全訳。

ルネ・シフェールはフランスの日本学の分野では傑出している研究者である。若い時に、能に大変興味を

もち、世阿弥の秘伝書を1960年にフランス語に翻訳したが、その作業の過程で、日本の古典文学の全体像をつかまなければ能をよく理解することができないと考えるに至り、『万葉集』、『保元物語』、『平治物語』、『平家物語』、そして能とは関係ないが、芭蕉の俳諧、近松の浄瑠璃・歌舞伎脚本など、次々と日本の古典文学の最も重要な作品を翻訳して行った。その一環として、『源氏物語』も翻訳したのである。唯一の完全訳として注目すべきものであるが、このシフェール訳の特徴については、次の新訳の紹介と一緒に述べることにする。

この新訳はパリ国立東洋言語文化大学（イナルコ）の日本研究センターの源氏グループが7年間をかけて、今年出版した桐壺帖の訳である。

« *Le Roman du Genji*, Le clos du Paulownia », *Cipango*, *Cahiers d'études japonaises*, n° hors série, *Autour du Genji monogatari*, 2008, p. 13-37.

「源氏物語–桐壺帖–仏語訳」、『特集号：源氏物語をめぐって』寺田澄江編、シパンゴ、日本研究センター紀要、2008年、13-37頁

一人の翻訳者によるものではなく、8人ぐらいがグループを組み、毎月一回集まり、何度も練り直しを重ねた翻訳で、現在は「帯木帖」の訳に取りかかっている。その翻訳の特徴について述べる前に、一渡りフランスにおける平安研究の状況を見渡しておこう。

『源氏物語』と平安時代に関する研究

2000年まではフランスにおける『源氏物語』に関する研究は皆無に近い状況だった。1990年以降目につく仏文の論文は、英語圏の研究者ジェームス・マックムランとロイヤル・タイラーの論文のみである。

James McMullen, « La mélancolie de l'amour : Motoori Norinaga et le *Dit du Genji* », *Japon Pluriel* 4, SFEJ, Philippe Picquier, 2001, p. 349-371.

Royall Tyler, « *Genji monogatari* : esquisse des ressorts d'une tragédie », *Cipango. Cahiers d'études japonaises*, n° 8, 1999, p. 159-182.

なぜ、光源氏の生涯があまりフランス人の研究者をひきつけないのか、はっきりと説明できないが、光源氏の生きた時代に対する研究の方は活発である。紹介するまでもないが、フランシヌ・エライユがその第一人者で、平安時代の朝廷制度、特に公卿の朝官制度を詳細に記述した部厚い本、『御堂関白記』の仏訳など、古代中世の研究の基礎を固めた極めて重要な業績がある。もう一人の大きな存在はジャクリーヌ・ピジョーである。和歌や歌謡についての論文や単行本の影響力も大変強いと思う。最近は『蜻蛉日記』の仏訳も出している。仏教の分野では、故ベルナル・フランクの業績も同じように平安時代の文化を理解するために欠かせないものである。それぞれを一つ一つ紹介することはできないが、こうした研究がなければ、次の世代の研究は進まなかったに違いない。

さらに、フランシヌ・エライユとジャクリーヌ・ピジョーの弟子の世代の成果として取り上げるべきなのは、平安史を専門にしているシャルロット・フォン・ヴェアシュアと中世和歌と詩学を専門にしているミシェル・ヴィエヤール＝バロンが欧米の研究者達と共に編集を担当した『欧文日本古代史料解題辞典』である。奈良時代、平安時代、鎌倉初期の研究の活発化を目指して作られた辞典で、歴史資料と文学系のテキストを紹介するおよそ1000の項目からなっている。各項目は英語またはフランス語で書かれていて、各項目は資料の紹介、主要な活字版の諸本、欧米言語での翻訳リストから構成されている。

以上簡単に紹介した研究は光源氏が生きた時代の理解に役立っても、当然のことながら、『源氏物語』という作品の代りにはならない。このようにフランスの研究は『源氏物語』の部分ですっかりと抜けていた訳であるが、『源氏物語』新訳を現在行っている源氏グループの活動は、現在までフランスで行われて来た平安時代研究の延長線上にあると考えられる。最初に『源氏物語』という文学作品に興味を持ち研究会を組

んだというよりも、寺田澄江が言うように、「研究プログラムを立ち上げる時、共同研究のテーマとして全員（日本学関係の専門家）の興味がさまざまに交錯できる素材を探したわけですが、古典文学から現代文学まで、そして文学プロパーだけではなく、文化史専門の同僚も含めて全員の興味が一致できるもの考えたとき、やはり『源氏物語』しかないだろう、ということでした。」（『世界の源氏物語』講談社MOOK, 2008年、ページ39）つまり、アンヌ・バヤール＝坂井も述べているように、「日本研究の専門家たちにとって、『源氏物語』は共通の文化的土俵、基盤としてあった」ということなのである。（同、ページ39）源氏グループのメンバーは月に一回というテンポで新仏訳を進める一方、ワーク・ショップ、シンポジウムなど、スケールの小さいものと、スケールの大きいものを、年に一回ひらくという研究活動を並行して行っている。

新訳の特徴

新訳は集団的な翻訳ということがその第一の特徴である^[注3]。順番にグループのメンバーが本文の数ページを受け持って下訳のようなものを用意する。研究会に集まり、先ず原文に忠実であるかどうか、つまり翻訳の正確さを全員で検討する。その作業にあたっては、物語の中の視点の動き、だれが話しているのか、だれの感想であるのか、動作の主体はだれなのか、だれの意志によって行われたか、といったことを特によく考えながら注意深く原文を読み直し、翻訳を再検討する。文法の精密な分析もするし、主要な古注釈、玉上注釈を始め、全集本、集成本の注なども参照している。基本的な方針は、文章が暗示的に表現していることを書込んでしまうのではなく、できるだけその暗示性をフランス語でも表現しようとするということである。つまり本文にないものは加えないようにするが、翻訳を工夫し、分かりやすさを犠牲にせず、その暗示性などを表現しようとしている。源氏グループのメンバーは言語学、文学、翻訳学、和歌、美術史など、専門が様々なので、それぞれが自分の感性、知識や経験をいかして、翻訳に貢献している。それから、皆忍耐強いので、時間がかかっても、あきらめないで適切な表現を探し続けるということも特筆すべきかもしれない。

原文にだれの動作や言葉であるか書かれていなくても、平安時代の読者にとって特に分かりづらくない場合は、その名前を付け加えることもする。この点は、シフェール訳と大きく違う翻訳態度である。シフェールは本文を非常に忠実に翻訳しているから、本文にな

い人物の名前を付け足すのをひかえたが、結果としては、フランスの読者にはだれのことか分からなくなってしまうところが多い。そのこととの関連で言えば、挿絵付きの伝語完全訳の『源氏物語』はシフェール訳を使っているが、より読み易くなるように、引用符を追加して、人物の対話、発言、内心語を地の文と区別している。

新訳では正確さを求める作業は、言葉づかいなど、文章の格調の再現に対する配慮と並行して行われている。現代の読者にとって読み易くて、美しい文体で書くように心がけているが、あまりに現代的・日常的・通俗的な言葉を避け、格調を崩さないようにしている。あくまでも、大貴族に仕えた女の人によって書かれた作品である訳だから、文学的にも香り高い言葉が適切なのではないかと思う。ただし、ルネ・シフェールのように、意識的に17世紀－18世紀の表現を使って、フランスの王朝時代の雰囲気や漂わせるような言葉は使用しないことにしている。けれども、原文の雰囲気をできるだけ再現しようと努力し、例えば、天皇に対する敬意が表現されている文章ではそれを忠実に翻訳するし、アイロニカルであったり、コミックだったりする場合は、それが翻訳に反映されるようにしている。

原文に対する忠実性は特に、和歌の翻訳にいちじるしく認められる。図5は桐壺帖の次の和歌の部分の写真である。

雲のうへ涙にくる秋の月
いかですむらむ浅茅生の宿

シフェール訳（図6）と新訳を並べて比べると、相違点がはっきりと分かる。新訳では、「住む」と「澄む」の二つの意味を持つ掛詞のところを、スラッシュを使って二つの意味に訳し分けている。この例では、第一句は、左に「雲の上」を文字通りに訳し、右に「宮中に」という譬えとして、対照的に翻訳している。すなわち、この5行の和歌翻訳は二つの意味の重なりを、スラッシュを使って表しているのである。こういう本文に対する配慮はルネ・シフェール訳には全くあらわれていない態度である。シフェール訳では、一つの意味だけを選んで、翻訳している。しかも、その意味が分かりにくい場合も多くある。新訳では、翻訳に反映させるのが難しい意味の広がりをも大事にして、翻訳するようにしている。おそらく、新訳は「不明瞭さによる神秘のポエジー」が欠けているとの批判をまねくかもしれないが、あくまでも内容の分かりやすさ

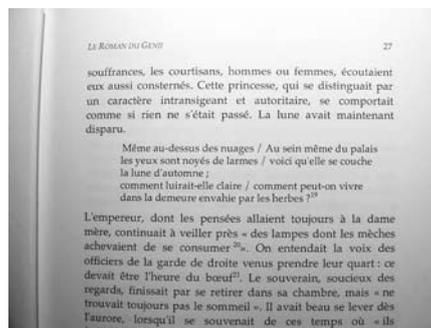


図5 『Le Roman du Genji』、イナルコの源氏グループ訳、2008年、「桐壺帖」、p.27

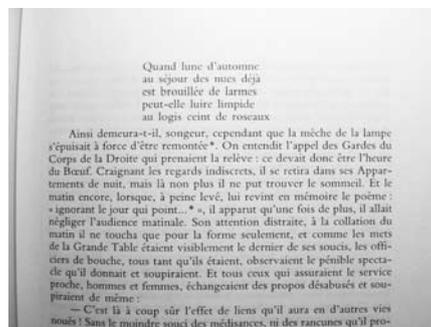


図6 『Le Dit du Genji』、ルネ・シフェール訳、POF出版、1988年（1977年初版）、p.13.

と文章の美しさのバランスを保って、『源氏物語』を訳そうとしているのである。

また、新訳では、原文の散文部分に織り込まれた漢詩や和歌の引用については、漢詩の句の翻訳、和歌全体の翻訳を脚注に挙げている。おそらくこのような和歌に対するこだわりは源氏グループのメンバーの半分がジャクリーヌ・ピジョーの弟子であるということと無関係ではないと思う。さらに、河内本との隔たりが顕著な場合は、脚注に、河内本の文章も紹介している。

シフェール完訳では注の予定もあったが、結局は書かれなかった。新訳では、以上紹介した脚注以外に、フランシーヌ・エライユなどの研究書を引用した平安文化関連の注、内裏の建物や公卿の役割といった注も付け加えている。

自画自賛になってしまうような気がするが、学問的な要求と文学的な要求の二つ共にこたえている訳なのではないかと思う。この困難な課題を果たそうとしているせいか、ペースが非常に遅い。今の調子だと、54帖を訳するのに90年以上かかるだろう。

本シンポジウムの発表では、フランスの図書館や個

人が所蔵している数少ない源氏絵を紹介した後、源氏絵全般におけるパターンとオリジナリティという問題を取り上げて、特に土佐光則が制作した源氏絵に焦点を当てて論じたが、これについてははまだ研究の余地があるので、その結果の発表は他の機会に譲りたいと思う。

注

1 Midori Yajima, « Yamata Kikou, 'La Japonaise' », *Cahiers pour un temps, Ecritures japonaises* 特集号, Centre G. Pompidou, 1986, p. 268-291. エマニュエル・ロズラン氏からこの論文についてご教示頂いた。

Monique Penissard, *La Japoyonnaise*, Favre, 1988. 268 p. モニック・ペニサル女史から、この『ラ・ジャポリヨネーズ』という本を頂いた。ここに感謝の気持ちをあらわしたい。

また寺田澄江氏に *Le Roman de Genji* 貸していただいたことについてもお礼を申し上げたい。

日本語では次の本を参照されたい：矢島緑『キクヤマタの時代』1999年。

- 2 ウェーリー訳では和歌の表示は一貫していない。桐壺帖では散文中に和歌は訳し込まれているが、イタリック体で表わされている。そして葵帖までは、散文と同じ字体であらわしている。
- 3 現在、定期的に作業に参加している源氏研究グループのメンバーは次の通りである。

責任者：寺田澄江（イナルコ准教授）、アンヌ・バヤール＝坂井（イナルコ教授）、カトリーヌ・ガルニエ（イナルコ名誉教授）。その他のメンバー：ミシェル・ヴィエヤール＝バロン（イナルコ教授）、ダニエル・ストリュープ（パリ・デイドロー大学准教授）、クレール碧子・ブリッセ（パリ・デイドロー大学 准教授）、エステル・レジェリー＝ボエール。

エステル レジェリー＝ボエール／フランス国立東洋言語文化大学（イナルコ）日本研究センター 准教授